

11
768

茶會の心得



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



11-588



六世三谷宗鎮著

茶會の心得

方雪庵藏版

大正
11. 5. 25
内交



修我儀...
 宣...
 物...
 方...
 流...
 疎...
 伊...
 惟...

書の翁鎮宗谷三川南世初

茶會の心得

緒言

一本書は千家表流の一派、故三谷宗鎮翁が記し置かれたる者にして、茶の會實行上の次第を知るに、極めて便宜なる著述なり。近時百般の文物皆舊態を改め、禮儀作法の如きも、往時の儀式と稍其趣きを異にす。然れども獨り茶禮のみ、婦女子教育の一部として、現に學校、又は家庭に於て舊時の式法を講習せるは、眞に喜ぶべき美事なりとせん。抑禮儀は人道の大綱にして、道德の外に現はるゝ形式なり。若し禮儀廢弛せん乎、人倫は忽ち紊亂し、社會の風儀は野蠻の陋俗に墮いらんこと必

然なり。禮儀を以て小節目となし、之を擯斥するが如きは文明社會の缺陷事たり。而して茶禮は一見小節目の如くなれども、審かに之を翫味せば、本邦特有の禮法に則り、文明的趣味の掬すべき者の存するを知らん。凡そ茶湯の稽古は、平素執り行ふべき坐作進退應對の禮讓を知り、兼て器具の扱ひ、及び配置方の如何を研究するを目的とす。又一つには業務の餘暇鬱を散じ、氣を養ひ、或は建築、造庭、書畫、骨董に關する趣味は勿論、賞鑑上眼識の教養を受け、外交と家庭とに多大の裨益を得ること擧げて數ふべからざるなり。今本書の要旨は茶湯の稽古を實地に應用する次第を説き、全く社交上、賓客饗應の方法様式を明示したる者なり。其實況は恰も、現代に行はるる西洋式のソワレーと畧其様を同うし、而かも質素にして清

雅なる日本式の饗應振りなり。尙茶湯の妙味を説ける文は世々乏しからざれども、今之に關する古話一二を擧げ、斯道の眞意を知るの一粲に供せん。往時利休居士に茶道の秘訣を問ひたる人あり、居士の答に

茶は腹によきやうにたて、炭は湯の沸くやうに置き、花は其花のよきやうに活け、夏は涼しく、冬は暖かなるべし、此外別に秘事なし。

と、其人曰くかばかりの事は誰も知る所なりと云ひたれば、利休は曰く誰も皆知るなれば其通りになすべし、我等が門弟子たるに足ると云はれしとなり。凡そ知るは只知るに過ぎざれども、其知る所を實行するは難事なり、居士は知ると行ふとの差別を理解せしめ、能く行ふことを訓戒したるなり。殊に

花は其花のよきやうに活るとあるは、萬事萬端天然を阻害せず、自然に應じて處理せよとの意ならん。然れども實行には必ず準繩あるべし、徒らに勝手氣儘の振る舞をなしたらんには、禮式も、妙味も、雅趣もなく、殺風景の舉動ならん。是れ茶禮を要する所以なり。又居士が或人の間に答へし句あり、

茶湯とは只湯をわかし茶をたてよ

のむばかりなる本を知るべし

とあり、又居士の孫なる元伯宗旦の句に

茶湯とは耳にて傳へ目に傳へ

心につたへ一と筆もなし

前の句は茶湯の驕奢贅澤に流れざらんことを戒め、後の句は文字にて傳ふべき者なく、以心傳心なる事を云へる者なり。

本書の著者は三谷流六世の宗匠なり。茶家としての名を宗鎮と號し、通稱を義一よちといふ。而して三谷流は千家表流の一派にして其祖は三谷良朴、通稱を丹下たにと云ひ、茶家の名を宗鎮と云ふ、又南川、或は不偏齋と號せり。享保年間の人なり。儒學を伊藤東涯に學び、茶道を千家江岑宗佐に受く。後ち一派を起し三谷流と稱す、當時千家正統の本釜と號して久田宗全、藪内紹智と並び立て名聲世に噴々たりき。次で儒者と茶道とを以て藝州侯に聘せられ、京都油小路竹屋町に住居せり。和漢茶誌を著し、斯道に益す、現今其古本尙散在す。男を良仲通稱を頼母と云ひ第二世宗鎮の名を襲ひ、藝州の藩士たり。次で子孫繼續せしが第六世義一翁の時代は明治維新の變遷に際し、家業を繼續し得ざるを以て、専ら國學を修め、小中村清

矩、小杉楯邨等の諸博士と交り、又歌道にも通じ、一時神官の職をも奉ぜり。然るに明治聖代の餘澤は茶道にも及び、家業を復興するの運に際會し、門人も彼是集りしが、去る明治三十二年二月京都在住の際不幸病歿されたり。其後未亡人咲子刀自は苦心精勵して、其遺子鶴子を養育しつゝ、自宅の稽古、其他女學校、又は出稽古に多年の間、勤勉されたる結果、一時殆んど廢絶すべかりし一家の流儀を遂に挽回し、七世をも繼續したる茶法を現代に存續するに至れり。實に此事たる刀自が貞操節義の致す所にして世間稀に聞見する所の功績なり。今や一家平穩の境遇に際するを以て、茲に先考の遺志を果さんとて此出版を思ひ起すことゝなれり。予や積年の交誼の師弟の縁故あるに依て、往事を追念し聊か感想を附記し以て江

湖同好の士に告る所あらんと欲す。

三谷流六世門人

大正五年七月

本多江涯識

茶會の心得

目次

- 一 茶會の心得の概要
- 一 茶會の差別、正午即ち晝の茶朝の茶曉の茶、夜話、し、飯後の茶、跡見の茶
- 一 茶會案内、前禮、後禮
- 一 庭圍り諸準備
- 一 茶室内の諸準備
- 一 客方の待合ひ
- 一 主人の出迎へ

目次

目次	二
一 客方露地入り及び初坐席入り	二十
一 主客の初坐對面及び初炭	二十五
一 會席膳部準備并に配膳給仕順序	二十七
一 初獻の中酒を進むる次第	三十二
一 引菜并に二獻の中酒主人の喫飯	三十五
一 吸物并に酒三獻を進め主客獻酬の次第	三十九
一 再進肴并に銚子の更り	四十三
一 湯桶を出す及び食事の仕舞	四十五
一 菓子及び中立	四十九
一 後坐の準備	五十三
一 後坐の出迎へ鳴物竝に後坐の席入り	五十四
一 濃茶進獻	五十七

一 後炭并に薄茶	六十二
一 退散	六十六

目次
終り

茶會の心得

六世三谷宗鎮講話



茶會の心得の概要

皆様の御所望に依りまして、茶會の心得をお話し申します、私の
 申しますのは、些頑固のやうに聞えますか、存じませぬが、初代
 良朴宗鎮以來、全く此通心得て家の業にいたし居りますこと故
 何卒その御積りで御聞き下さりませ、尤も貴君方へ對しまして、
 今箇様に申上げまするは、甚だ如何で御座りまするが、乍失禮初
 心の御方も在らせられまして、即ち其御所望にも相成ましたる

茶會の心得の概要

茶會の心得
事故其處は何卒悪しからず御聽許を願ひます、扱追々御話し申
上まするが、強ち私が申す通りに、庭園、數寄屋を首め、器具萬端が
全備せねば、茶湯が出来ぬなどいふ様な譯では更に御座りませ
ん、御承知の通り、元來茶事は清乏の樂み故、貴賤の分限に従ふこ
と勿論で御座ります、利休居士が蘊奥を窮めましたる泉州堺の
南宗寺慶首座といふ僧の書きました茶會の大法七箇條の中に
も庵主貧にして、茶飯の諸具不備、美味も亦なし、露地の樹木、天然
の趣、其心を得ざる輩は是より速に歸り去れと御座りますれば、
如何なる貧賤の人といへども、茶會の出来ぬことは決して御座
りません、其心が道に適はぶ中々面白い茶事が出来て高貴の方
も御成があつて兎角風情は佗釜に多いと古來御賞美のあるこ
とで御座ります、併し貴賤共に全體の心掛が薄うては主となり

ても時の趣向を盡すことが出来ず、客と成ても亦其妙味を解す
ることが出来ません、此に通り心得のある所は御承知置き相
成様致したう存じます。

茶會の差別

正午即ち晝の茶、朝の茶、曉の茶、
茶、夜話し、飯後の茶、跡見の茶、

茶湯は爐と風爐に依りまして、時刻に朝と晝と夕との差別が御
座りませす、晝の茶と申すは乃ち正午で御座りまして、是は爐風爐
にわたりて普通の催しで御座ります。
朝の茶と申すは風爐の時に催しますもので、昔は朝六つ半時又
は五つ時を以て案内いたしました故、今もそれに適ひます時
刻に致すことで御座ります。
夜話と申すは口切の茶に於て催しますもので、時刻は薄暮で御

茶會の差別

座ります。

曉の茶は夜ごみとも申して、冬日の催事で御座ります。昔の時刻は朝七ツ半時で、今は則ち午前五時が相當で御座ります。これは多く残月の頃に於て催します。至つて風情のあるもので、雪の曉などは別して妙で御座ります。

飯後の茶は菓子の茶とも申しまして、昔より朝飯の後、夕飯の後と致して御座ります。依て刻限は朝飯後ならば、午前九時乃至十時、夕飯後ならば(爰に夕飯と申しますは今晝飯の事で御座ります)午後一時より二時迄の間に於て然るべく取定めて案内致すが宜しう御座ります。此菓子の茶は爐にも風爐にもいたします。

跡見の茶と申すは爐にも風爐にも致しますが、是は正午の茶でも朝の茶でも當日主なる茶が終りまして、其客の歸りました後

直に跡見の客を招きますもの故一定の時刻がござりません、前の客が去りましたらば、只今と案内いたすもので御座ります。客の方でもおのゝ誘合あひままして前客のいまだ退きませぬ中に亭主方の近邊まで参りまして、何某方に扣居りますれば同方へ御案内下されませと、亭主方へ申送りするが作法で、畢竟跡見とは當日の主たる茶湯の晝の茶とか、朝の茶とかの風情を想像して其跡を乞うて見るの言で、客より所望いたすもので御座ります。

尙年頭には大福と稱へ、晩秋には名残といひ、其他にも種々のすさみが御座ります。なれども時刻はまづ右に據りて催すものと御承知置かれて宜しう御座ります。次には案内と前禮後禮の心得が御座ります。

茶會案内前禮後禮

凡茶湯に人を招きまするには、前以て日を定め、時を定め、又相客を定めまして、これを確と案内状に書きしるして招待致すこと
で御座ります、高貴の方へは亭主自參上致して御招待申上るが
宜しう御座ります、尤是は平人の心得で御座ります、總て此御話
は私共平人の心得を持ちまして申上まする儀故宜敷御酌量を
願上ます。

右の相客を定めまするには、別段老若には拘はりません、又必親疎
を分るにも及びませぬが、只成るべく心情の適ひさうな、談話の
合ひさうな人々を組合せて、いさゝか遺憾のない様、主客娛樂を
極むるやう、豫て注意致すことで御座ります、先師の歌にも

茶湯には良茶よい酒菜一つ飯和かに相口の友

と詠んで御座ります、是は茶事總體の心得を示されましたもの
故、其深意のある所を能々御味ひ相成度存じます。

扱又客方におきましては、案内状を受けて承知の返事を致しま
すと、其招かれた茶の當日より二日前若くは前日に亭主の許に
行きました、来る何日は御茶事の御招に與り有難う存じます、相
樂み御時刻參上仕りたく、右御禮を申上ますとの口上を述べ、挨拶
を致します、是を前禮と申すので御座ります。

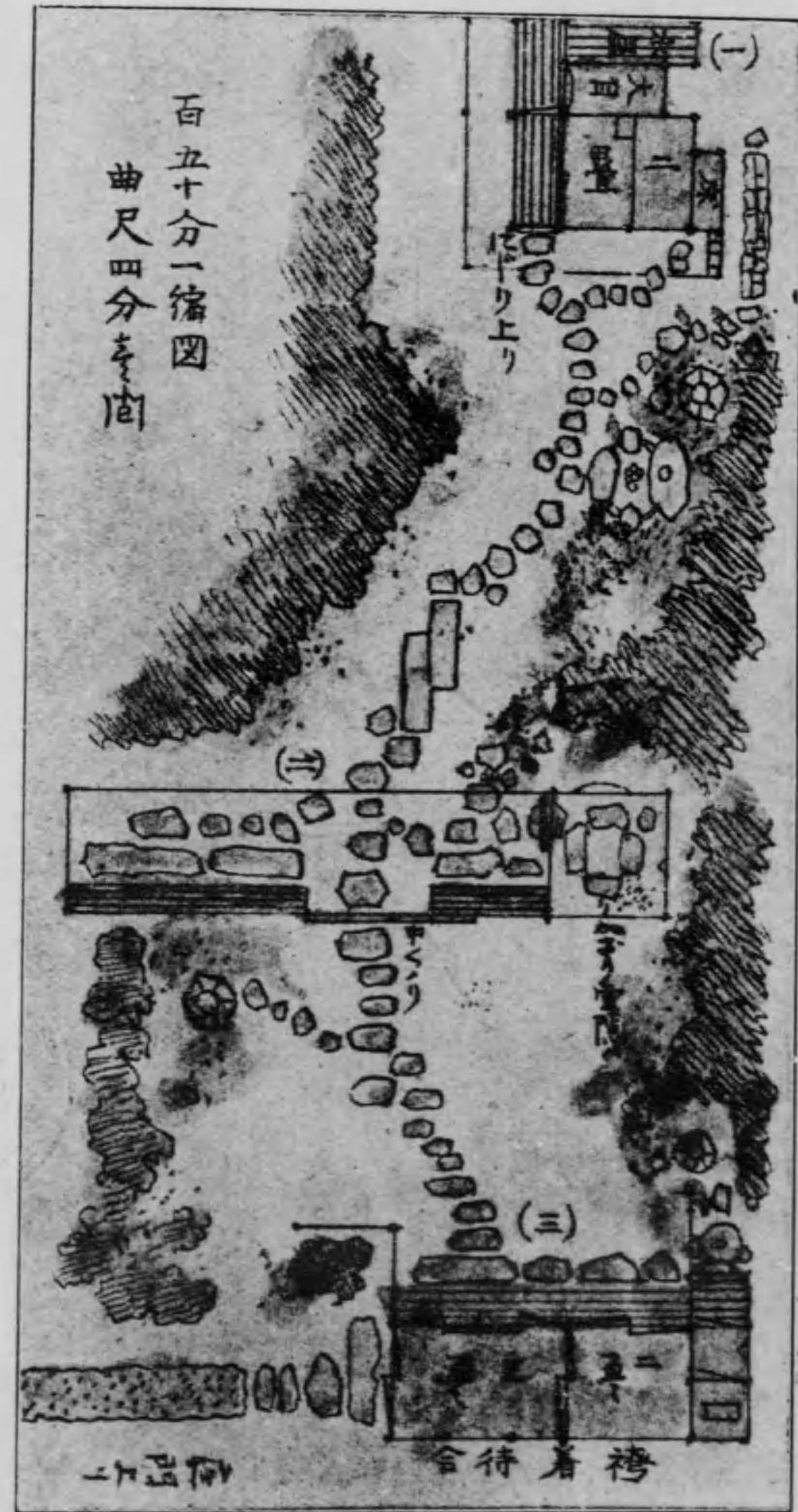
茶會の翌日にも亦同様出向まして、昨日は結構なる御茶を下さ
り有難う存じます、種々御風情の御事で、寛々相樂みまして御座
ります、右御禮を申上ますといふ様に相述べます、是を後禮と申し
此、前禮後禮は成るべく、自出向が宜しう御座ります、高貴の方に

茶會の心得
 對しては勿論の事で、若無據差支が御座ります時は相應の代人を遣しますか、又は手紙を以て申入りますも悪うは御座りませんが、常に代人又は手紙にて宜いものと致しまするは、道において最無禮なる心得で御座ります。

庭園り諸準備

是よりは掃除の事で御座りますが、先づ晝の茶の時の心得を御話し申上ります、尤も爐を主と致して風爐の時の事は其異りのある所にて御話し申す事に致します、茶室内の掃除は天井圍を始と致し、床の落掛、鳴居、敷居、柱、窓、戸、障子、其他の物におきましても皆塵を拂うて能々拭ひます、壁、腰張、太鼓張、戸、障子、簾、疊、爐は勿論のこと、若損じがあらば、豫て更めますか、又は取繕ひを致すこと

茶室及び庭中諸設備の圖



百五十分一縮圖
 曲尺四分を間

(一)(二)(三) 茶室、三谷派方雪庵の圖
 中待合腰掛けの圖
 袴着並に外露地の待合腰掛けの圖

で御座ります。
茶室外は内露地、外露地、内露地とは中門以内を云ひ、外露地とは中門以外をいふは申すに及ばず、表の門前よりいたしまして、客の通りかゝりまする所は、残る隈なく掃除いたしまして、竹戸樋、竹垣などの色の變りましたものは、新に取替ること、御座ります。尤竹垣は古い上に、處々青竹をさし加へましたのも、却つておもしろうござります。
砂雪隠(砂雪隠)は内露地に設く、貴人の所用なりは眞砂を取替まして、砂懸踏石など、篤と清めおきます。外露地の雪隠、外露地の雪隠は平人の用なりも、踏板をよく、洒ぎまして、新なる薦を切り揃へて敷き置きます。薦は毎日敷き替へます。
手水鉢は勿論、淨らかにいたして、清水をなみくと、漉へて内露

地の方へは赤杉の杓、外露地の方へは檜の杓を付けます、雨天には蓋を致します、又寒氣の強い日には湯桶か或は掻合はせ塗の片口に湯を入れて別に出し置きます。

塵穴へは青葉を入れて青竹のちり箸を付け置きます、口切の節は青葉、紅葉、黄ばみ落葉などを見合せて入れ置きます、時に取つての風情で御座ります、多くて見苦しからぬは文車の文塵塚のちりと兼好法師は申されましたが、此塵穴のちりは、何でも少ない方が見よいよやうにおもはれます。

飾箒は内露地の方へは蕨箒を用ゐます、外露地に用ゐますは青葉の棕欄箒で御座ります。

敷松葉にはまた心得の有るもので御座ります、口切の茶湯に敷き始めまして、暮の三十日に内露地の方は残らず取揚ぐるを古

來定に致して御座ります、是は新に春をむかふる心ばえで御座ります、さうな、さて翌年二月の初に至りまして、外露地のをも能きほど取り揚げます、狭い庭は其儘に致し置いてもよろしうござります、三月の末最早風爐を出さんとする時に及んでは残りなく取揚ぐることで御座ります、尤もこれは舊曆のさたで御座ります、今日の所でも尙ほ右の時候に據りまして、先づ十一月の始めより敷きはじめ、立春の前に於て内露地の方を取揚げ、三月初旬にして、外露地に及び、四月末頃全く取揚ぐることに、私は致して居ります、又松葉の敷様には二通り御座りまして、一は立木の下、彼方此方、敷箇所へ敷きます、一は露地の内外一面に空地なく敷詰ます、併飛石を除くことで御座ります、又松樹の無い庭には敷きません、其敷箇所に敷きます時は、内露地、外露地を合せ

て半の敷に致します、例ば内露地に二箇所敷きましたれば、外露地の方は一箇所か又は三箇所に致します、外露地を四箇所と致しますれば、内露地は三箇所或は五箇所に敷き分けますの類で御座ります。

袴着へは煙草盆、煙草盆には火入、青竹灰吹、煙管二本、煙草入、香箸等を具ふべし、敷紙には奉書又は杉原を用ふべし、手焙を出し置きます、而して上り口の脇へ寄せかけて露地草履を客の人数丈出し置きます、雨天には露地下駄に取替へて露地笠をも出します、老人を招きました時は露地杖を出します、又其袴着の次の間邊へ小僧か小婢をひかへさせ置きました、客が見えましたらば、白湯か香煎湯の類を汲で出させます、畧しましては瓶掛に湯沸をかけ、盆に茶碗を客敷だけ載せ茶臺を附て、豫て袴着へ出し置

ても宜しう御座ります。

待合には圓座を客敷だけ出して下座の方に重ねて置きます、煙草盆手焙をも出し置きます、是も下座の方で御座ります。

釣棚があらば料紙硯を置くがよろしう御座ります。

貴人待合は不用の時でも能く掃除を致し置くことで御座ります。

内待合が御座りますれば、中立の前におきまして、圓座、煙草盆、手焙などを出すことで御座ります、凡て外待合同様でござります。

扱水を撒きます、午前十時頃より始めます、先づ表の方よりいたしまして、内露地、外露地、中門、垣、樋、庭、樹、飛石、手鉢、燈籠、飾、箒、塵穴の木葉、迄もいさゝか残りなく、幾度打注ぎます、又茶室の圍、待合、雪隠などの腰板、或は戸板の類も、凡て乾きたる處の無い様に氣を付けて濡します、高い腰板等は地より三尺許上まで濡し

Handwritten mark or signature.

ます、尤壁に水のかゝるは宜しうござりません、此水そゝぎは晴
雨に拘はらずいたす事で御座ります、是等で大方外圍りは相濟
ました故内の方へ這入て御話申上ませう。

茶室内の諸準備

先釜を懸まするは午前八時よりおくれぬが宜しうござります、
初より席中へは懸けません、次の間などに懸しめ置きまして後
に茶室内へ移します、其移した跡へは又替釜を懸置ことで御座
ります、風爐の時は替の土風爐をも勝手に用意いたし置ます。
爐風爐ともに灰は最もよく改め置くことで御座ります、床へは
軸物をかけ置きます。
釣棚のある席にては羽箒香合を飾り置きます、二重棚ならば下

棚が宜しう御座ります、中柱のある席では羽箒は袋懸の釘へか
け置きます、窓連子などは障子をたてゝ皆簾を懸置ます、寒氣の
強い節は一二箇所ささ戸を立置くも宜しう御座ります、併夫は
室内の明りを能々見合せて致す事で御座ります、突上窓茶室の
屋根に穿ちたる窓なりは障子を引きますして簾を懸けます、而し
て室内の明り加減に従うて突揚の戸を高うも低うも致します、
亦其簾も明りの鹽梅に依りまして、窓一面に伸べ、或は半まき、又
は四ツ折などに致します、中立より後は取除ても苦しう御座り
ません。

一應斯様に準備致しまして亭主は尙又彼掛しめ置きましたる
釜の沸加減より致して煙草盆の火入、手あぶりなどの火勢の模
様内外の掃除水のそゝぎ方等に至ります、能々注意致して

何遍となく改め見廻りますこと御座ります、さて時刻前に於
きまして、亭主は衣服を更めて客の入來を相待ます。

客方の待合

客は案内の時刻より少し早めてまゐりまして、袴着に着座致し
て煙草でも吸うて相客の來るを待合ます。

何か用意の包物などが御座りますれば、下座の方へ差置が宜し
う御座ります、給仕の者は客が見えましたらば前に申した通り
湯を汲んで出します。

客數が揃ひましたれば御休息の上腰懸へ御通り下さりませと
案内いたします、此時客方にては上客二三四詰等の席順を定め
ます、懷中物等は皆出し置きまして鼻紙と帛紗のみふところに

致すこととでござります、而して上客は相客へ禮を致して草履を
穿て露地に入ります。

二客以下同様で御座ります上客はまづ待合則ち腰掛へ歩み寄
りまして煙草盆、手焙を自分と二客の間に置いて圓座を一枚取
て腰をかけます、二三詰も各圓座を取て腰を掛けます、憚の儀で
ござります、もし雪隠へゆかんとおもひましたらば、此時がよ
ろしう御座ります、亭主が出迎へましての後にゆくは悪うござ
ります。

露地笠を用ゐます時は掛緒の際を持つが宜しう御座ります、
そして腰かけの脇へ立かけて置きます、席へ入ります時は亭主
の笠を立てかけて置きましたる所即ニジリ上りの片脇へ同じ
く立掛けて置くこと御座ります。

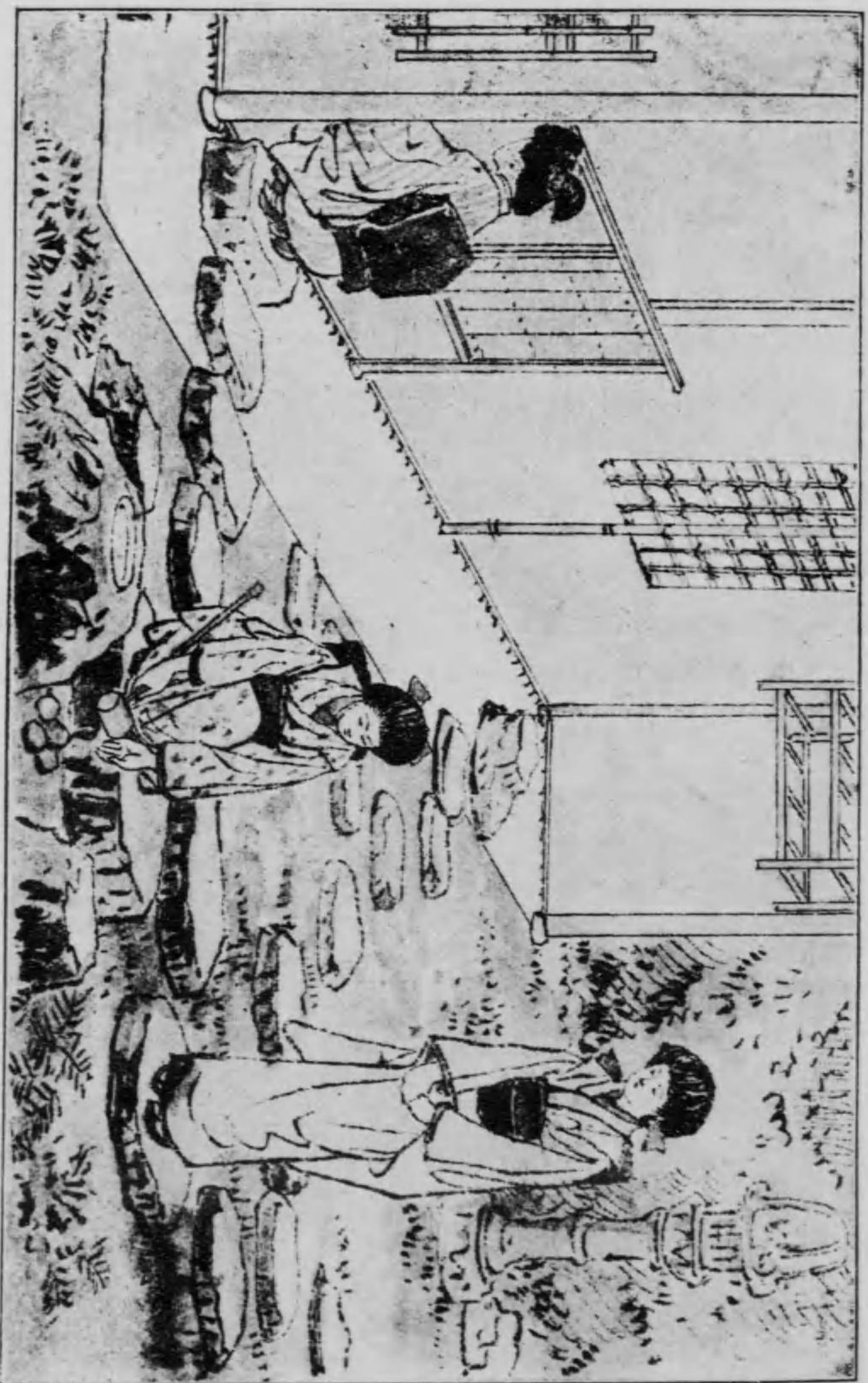
主人の出迎へ

亭主は客が總て待合へ着きます時分に茶室へ炭斗、灰器を持出
 まして火を能程に爐又は風爐へ移します、灰をも綺麗に致し、燻
 物を炷て釜をかけ灰器、炭斗は勿論勝手へ引て座掃を致して爐
 縁又は風爐を拭ひます、是等は客を腰掛にまたせ置て致す事
 御座りますれば、極めて速かにするが宜しう御座ります、然して
 大羽を持ち出でましてニジリ上りの戸を明け、其邊を五羽か七
 羽許り外へ掃出します、狭い露地で茶室の前に腰懸の有る所な
 どは内の方へ掃き込むことで御座ります、それより爐前にまゐ
 りまして大羽を脇に置いて釜の口を切り、大羽は勝手へ持入りま
 して水揚桶か片口を持って出て、直に草履をはいて手水鉢の前に

ゆき腰を下して舊の水を汲出して手水鉢の圍又は鉢前の石、左
 右の石などへ五杓七杓許りもそよぎかけて其跡へ水揚桶の水
 を靜に音のする様にして溢れ出まするまで入れて杓を正しく
 直し桶はニジリ上りの内へ入置て、直に出迎にまゐります、中門
 或は中潜りの際まで歩み出まして戸を明けて禮をいたします、
 客方も惣禮で御座ります。
 此出迎の致し様は身分に依て差別のあることで御座ります、先
 づ貴賓に對しましては門より外へ出て飛石を一ツ二ツ又は三
 つまでも進みまして腰を低ういたし、頭を垂れ手の指先を足の
 甲に付く迄下げて禮をいたします、極めてやんごとなき御方の
 成らせられました時には飛石を五ツ許りも向へ進み出まして其
 石を除し蹲踞て御迎へ申上ることに承りて居ります。

客方露地入り及び初座席入り

客方におきまして、亭主が同等以下の人ならば腰掛の前の石に立て出迎を請けて宜しうござりますが、もし敬ふべき人ならば、亭主の心得同様飛石を幾つか進み、上客は中門の際まで入りまして、石を下り御請仕りまする儀でござります、二三四詰も勿論上客に準じて敬禮を行ひます、併これ等は其庭の廣狭にもよりますること、強ちに斯とも申されません、其所は則ち臨機應變に處する主客の活動で、先大體を申す儀と御承知置下さりませ、又客は右出迎の禮が相濟ましたらば、亭主が内露地の半過まで引取ましたる後、ふたゝび腰懸へ凭るが宜しう御座ります、禮が濟むや否直に腰を懸るは失敬でござります、是より席へ進



様のり人席坐初(圖二)

みます、是を初入(後入)に對する稱へ中立前を初座と云ふと申し
ます。
亭主が席内へ引取ました後客は尙少々の間申さば、二三分間靜
に話しなど致しまして緩急を計ひます、是らは全く上客の巧拙
によります、即て上客は腰掛を離れまして圓座を背後の壁に立
かけ次禮して内露地に進みます、まづ中門を開き跡は其儘明置
て手水鉢の前に來て手をあらひ口をそゝいでニジリ上りの前
にゆきまます、さて沓脱石の上に踞りまして戸を靜に明け座上に
手をついて一應席中を窺ひそれより膝を進めて席に這入りま
した戸口の方へ向き返りまして、草履を取重ね、戸口の下の邊へ立
かけて置きます、左様致して初の通向き直りまして先床の前に
進み掛物を見ます、又爐の前に來て釜を見ます、風爐ならば其形

客方露地入り及び初坐席入り

よりして釜又灰の模様をも見ます、棚が御座りますれば其飾付を見ます。

見了りましたれば假座本座にあらぬを云ふに着て末客の爐前に行て見まするまで見合て居ります、もし扇を持ち込みましたらば此時は前に置きます、扇を前に置くは假座のしるしで御座ります、二客以下も同様に致します、此假に坐しまするは次々の客の床前に就て懸軸を見るに差しつかへぬ爲で御座ります、客が亦爐前にゆくにも差支ぬ様に致さねばなりません、尤もこれは茶室に依り上客の見計にていたすことで御座りますれば假座には定めのあるはずも御座りません、勿論直に本座へ着て差支の無い席も所々に御座ります、是等の見合は慣れで自然に得るものと御承知置を願ひます。

扱又二客以下の席入で御座りますが、其二客は上客が手水鉢の前にもつたる時分に圓座を後方の壁に立かけ次禮し進みまして、手水を遣ひ沓脱石の上に居てニジリ上りの口より茶室内を見合せて、上客が床を見了り爐前へ回る時に席へ這入ります、其他の事は上客に付て申した通りで御座ります、三客以下も皆同様に御座ります、尤も詰は腰掛の煙草盆、手焙を壁際へ直し置きまして中門を閉めて懸がねをかけます、簀戸など揚戸の類で出迎の前より揚げて御座ります、その儘にして下さぬが宜しう御座ります、又席に入りましてはニジリ上りの戸を際やかに音の聞ゆる様に引立ること、御座ります、上客は詰が床を見終りて爐前にゆきましたれば床の方の本座に着きます、御承知で御座りませうが、當流にては假令下座床下座の方にある床を

云ふの席にても床の方を上座と仕ます、二客以下も皆次第に着座致します、座定りましては扇を後に置きます、此時は要を下座の方に向ふこと、御座ります、尤扇を茶室へ持ち入ります、主客同等の時に限り、高貴の方に御陪席仕りまするか、又は主人が長者で御座つた時には決して扇は席中へ携ち込みません、其時は袴着か腰掛か、或は昔の釣刀懸が残してあらば、其刀懸か、いづれに致しても、此三箇所の中にさし置くこと、御座り

ます。さて亭主はニジリ上りの戸の締りました音を聞きますると、直に水揚桶を提て、手水鉢の水を足しにゆきまする、内露地を前にいたし、外露地を後にいたします、清らかな音の静に席中まで聞ゆる様に致すがよろしう御座ります、尤も是等は勝手の物慣れたる者へ申付ても、苦しうは御座りません、右の水が濟みますと、直接搦に出ます、勝手口を明けてまづ一禮いたします。

主客の初座對面及び初炭

客は此時總禮をいたします、夫より上客以下一人々々、挨拶を致します、寒暖の言詞よりして、當日の禮を述べます、末客の挨拶が了りましたれば、上客は先第一に露地の風情掃除の行届きましたる事などを賞します、亭主は勿論謙遜致して、請け答へを仕ります、是等挨拶振などのことは、皆様能々御承知の言葉で御座ります、故一々は申しません、第二に上客は懸軸の事を申します、亭主これに答へます、此懸物の談が濟みましたれば、

亭主は勝手口を明けたる儘水屋へ退て直に炭斗、灰器を運び出して初炭を致します、風爐の時は懸物の話が相濟ますと、席に進んで風爐を拭きます、終つて勝手口に退き、其所に坐し、勝手を見繕ひまして御湯漬を差上ますと申して勝手口を締切直に會席でござります。

爐にては右申す通炭が會席の前になり、扱客は一同無言で亭主の炭を見ます、上客におきまして道具を賞し、又其所作名などを尋ねます、風爐釜、炭斗、灰器といふ様に成るべく順序に致するがよろしう御座ります、香合はふだん御承知の通り乞うて見るが定まりで御座ります、亭主は炭斗、灰器を引き大羽にて座掃を致して、勝手口を締めます、香合が戻る前に勝手口を明け見合居て戻りましたれば、爐前に出まして爐縁が塗縁ならばか

たのごとく拭ひ、釜の口も切りまして香合を引き勝手口に坐し、香合を脇に置いて、勝手を見繕ひ御湯漬を差上ますと申して、勝手口を締めます、此等は申すまでもなく、御詳知のこと、今更失敬の様ではござりますが、一應順序として申します、儀で御座りますれば悪からず御聞をお願いします。

會席膳部準備並に配膳給仕順序

勝手方は此時準備の膳へ向付、飯碗、汁碗を仕組まして亭主に渡します、折敷の綴合目を丸前、角先と申して丸いものは綴目を前にいたします、角なものは向にいたします、是は折敷ばかりではなく、總て綴目のある器物は右丸前、角先の定めに従ふことで御座ります。

箸は膳の縁へかけて五歩ばかり膳の外へ出します、又飯の熟し加減汁其外の物の鹽梅等最も肝要の事で總て冷めぬ様熱過ぬ様に注意致さねばなりません、而して勝手の事は極めて敏捷に致さねば間が脱けて客が退屈いたします、又早い为宜いとて自然騒がしうなる様では是また彌々悪しう御座ります、客は靜穩に席に着て居ますもの故勝手の動靜も直に分ります、兎にも角にも亭主の巧拙にかゝはります、儀でござりますれば平生勝手の人も能々心懸ねばならんことで御座ります、扱亭主は勝手口を明て膳を持出、上客より次第に据ゑます、客は膝をすゝめ兩手にて膳を受け取りまして禮をいたします、亭主も禮を返します、膳を引了りましたらば勝手口に坐して、定めて不加減に御座りませうが宜しう食上りませと申します。

客はまた有難う存じます、何うか御通ひは御勝手の人へ仰せ付られませと申す様に挨拶を致します。

亭主は右の挨拶を請け勝手口をしめます。

客は上客より次禮を致して飯碗汁碗の蓋を下座の方へ天向に除置て箸を取ります。

亭主は客の汁を吸ひ切ります、時分を見合せて飯器を持出します、飯器の御飯は前の方へ寄せて入れます、然して蓋の上に通ひ盆を載せて杓子を盆の左の向より右の前斜に伏て置きます、かやうに致して上客の前に持出しまして、先我前に置て盆を兩手にて右の脇にとり杓子を右の手に持ち左の手にて飯器の蓋を少し明けて杓子を中へさし入れ置き、右の手に盆を取り左の手を盆へ添て飯をさし上げませうと申して盆を出します、かやう

に申すと餘程手順が煩はしい様でござりますが何もむづかしい事はござりません、只是は手で爲る業を口で申す故瑣々敷なるのでござります、何ぞ左様に御聞取を願ひます、尤も是からは成るべく短簡に申上る積りで御座ります。

上客は亭主が給仕盆を取ります時、御飯器は其儘御任せ下さりませと乞ひうけます、此時亭主は左様ならば御任せ申上ますと申して給仕盆を脇へ置き飯器を前向へ回して上客の膳の向ふ右の方に置きます。

然して又盆を取り不加減ながら汁を替て食上りませと申して汁をすゝめます。

上客は結構な御鹽梅でござります、今一椀頂戴仕りますと云ふ様なる挨拶を致し、又次客にも會釋いたして汁椀の蓋をして出

します、二客以下皆同様に御座ります、亭主が汁を替へます間に上客は飯器を取りまして左の膝の上に置き蓋を天向けて膳の向ふに置きまして、椀に飯を次ぎ、杓子を元の通り飯器に入れて蓋をもいだして、次へ廻します、尤も飯器の蓋は次々の客取ついで末座に渡し、詰はこれを膳の向ふに預り置きます、ことも慣れた致し方でござります。

右の飯器は詰の客が前向ふに廻して膳の向ふの下座の方に寄せて出し置きます。

亭主は詰の汁の替りを持ち出でまして、これを渡し其盆に件の飯器を載せて引取ます、勝手口は其儘明けおいて、直に初獻を出します、飯器より前に出すことも致しますれど、正式の中酒は此所が初獻でござります。

初獻の中酒を進むる次第

引盃を臺に載せて左の手にもち爛鍋の口を左にいたして右の手に持ち上客の前に出で下に置き盃臺を右に持直し左の手を添て上客の膳の向ふの右の方に出します、さて爛鍋を右に持ち左の手を口に添へて膝を進め御酒をさし上ませうと申しませう。上客は何うか其儘御まかせ下さりませと申します。亭主は先づ差上ませうと申します、此時はまかさぬがよろしう御座ります。

上客は然らば仰に従ひますと申し、次禮を致して盃臺を取り又上の盃を一まい取りまして盃臺を二客へ廻しおいて酒を受けます、二客以下皆同様盃を取りて臺を次へ送ります、詰は盃を取



様るむ進を酒中の獻初席會(圖三)

て臺は膳の向ふ下手の方へ預り置ます、亭主は名々へ酒を次了
りましたれば爛鍋を持って、勝手へ引き取り通口は明けおきまし
て直に煮物を持ち出でます、通盆に碗を一つ載せて、上客の前に
坐し盆を一應下におき碗を兩手に取上げて、膳の向ふの右の方
に置きます、以下同様に致します、是を略しましては上客の分を
右様にいたし、他はまとめて長盆に載せ持ち出でまして、失禮な
がら略しましてござりますと、斷を述べたのごとく二客以
下へ引きます、尙略しましては上客の分より致して皆ひとつ長
盆に載せまして大略の斷を申して一々引くことも致します、併
敬ふべき人に對しまするか又は祝賀、年回など重い心持にて催
しましたる茶事には略しません、宜しうござります。
右煮物を出しましたらば、勝手口に坐しまして、不加減ではござ

初獻の中酒を進むる次第

りますが食上りませと申して勝手口は明けたるまゝにして引き取ります。

上客は右の亭主の辭を請けて挨拶いたします。

二客以下も惣禮いたします、それより各煮物を給べます。

亭主は間なく飯器を持ち出でます、總て前の手續で御座ります、

はじめ中酒を飯器より前に出しました時には其處でも飯器の

前に爛鍋を持ち出でまして前の初獻の時通上客より次第に酒

を次で廻りまして爛鍋を持ち入り直に飯器を持ち出ること

ござります。

上客は最初の通飯器を乞うて預ります、尤も此度は直には取り

上げません、亭主相伴の時まで其儘に預り置きます。

亭主は又汁なりともと申し替りを問ひます、客もまた替へて苦

しうは御座りません。

亭主汁を替へ了りましたらば通ひ盆を持つて勝手へ退きます、

通ひ口は其儘明け置きまして

引菜、竝に二獻の中酒、主人の喫飯

引菜を持ち出します、鉢ならば焼肴と香物とを盛分にいたして

宜しう御座ります、重箱ならば上の重が香物、下の箱が焼物で御

座ります、然様致して青竹の菜箸を附けます、是も上客の前に持

て出て膳の向飯器の次へならべて置きます、又勝手口に坐して

焼物をめし上り下されとの言葉を陳べます、此引菜は重い茶湯

の外は省いても苦しうござりません。

上客は種々御丁寧に有難う御座りますとの挨拶をいたして、其

引菜竝に二獻の中酒主人の喫飯

儘預り置き一同も禮をいたします。
 亭主は直に爛鍋を持ち出でます。是が二獻で御座ります。はじめ
 飯器の前に初獻を出しましたら此處が三獻目に相成ます。此時
 も上客の前に坐しまして前の通進めます。上客は何分此度は御
 任せ下さりませと申して爛鍋を乞ひ受けます。
 亭主も此時は強ては申さず左様ならば仰に隨ひ御任申上ます
 と申して爛鍋の口を右に向け替へ引菜の次に並べて置きます。
 然いたして勝手口に引き取りまして、いづれも不加減では御座
 りますが何うか宜しう食上り下さりませ。私も暫時御免を蒙り
 まして勝手に御相伴仕ます。御用が御座りますれば御遠慮な
 く御呼び下さりませといふ様なる言詞を述べます。
 上客はこれを請けまして、種々御心盡しの御料理を戴きまして、

有難う存じます。何卒御主人様にも御寛と食上りませと申す様
 に挨拶をいたします。

二客以下も亦皆禮をいたします。挨拶をはりますれば亭主は勝
 手口を締め勝手へ退て食事をいたします。

尤あまり緩々と致しては客が退屈して悪しう御座ります。故、成
 る可く速かに濟して客の酒食の了ります時分を待ちます。爾
 が宜しう御座ります。客方にては亭主が勝手へ退きました後、上
 客は二客に會釋いたしましたして、飯器を取り上げ飯を椀に次で器
 を二客へ廻します。取扱様は凡て前の通でござります。
 次に焼物を椀の蓋に取り置きまして、器を二客に送ります。二客
 以下總て同様で御座ります。
 二客は又爛鍋を取りまして上客へ酌いたします。

上客は禮をいたして、盃を出し酒をうけます、三客も亦二客の持ちましたる爛鍋を乞ひ取りまして二客へ酌いたします、以下四客は三客に詰は四客にと申す様な凡て下座の客が上座の客の酌をいたしますが、一通りの定めでござります、尤末座の酌は其上に居まする客がいたすことで御座ります、又詰は飯器をはじめ、引菜の器右の爛鍋などを自分の膳の向ふ下手の方へよせて、前向ふに廻し替へて出し置きます、亭主は前申しました通客の酒食の了りますを見合居まして、能い時分に通ひ盆を持ってまゐり勝手口を明けて失禮を仕りました何も不加減の物で定めて召上りにくう御座りませうと申します、此時上客は御叮嚀の御料理でござりまして殊にいづれも宜い御鹽

梅で誠に快く頂戴仕りましたと申す様な挨拶を致します、二客以下も皆禮をいたします、亭主は此禮を請けまして如何で御座ります、飯をかへてさし上げませうかと問ひます、

上客は最早充分で御座ります、何卒御取入下さりませと申します、筒様に申しますと、亭主は席に進みまして、先づ飯器を盆に載せて持ち入ります、次に引菜の器を引きまた出で、爛鍋を引き去ります、略しては長盆を持ち出でまして引菜の入物と爛鍋とを一緒に載て引き入ること致します、勝手口は其儘明けて置きまして直に

吸物並に酒三獻を進め、主客獻酬の次第

吸物を持ち出でます、出し様は煮物と同様でござります、尤此時は引替に煮物椀を持入ます客方におきましても亭主の辭儀を受け、吸物を取り上げます事など、總て煮物と同様でござります。次に亭主は爛鍋と八寸を持ち出でます、右に爛鍋、左の手に八寸を持ちまして上客の前に坐し下に置いて更に爛鍋を取り、今少し酒をさし上げますというて次にかゝります。上客は挨拶をいたして、盃に酒を受け、亭主は又客の椀の蓋を請うて八寸の肴を挟みます。二客以下も皆同様にいたします、さてまた亭主は上客に對しまして、何卒御盃を頂戴仕度御座りますと所望いたします。上客はまづ御主人様の御盃を頂戴仕りたる御座りますと、是又所望いたします。

亭主は今日は何分にも御上客様の御盃を頂戴仕りたる存じますと申して強ひて乞ひます。此時上客は然らば失禮ながら仰せに随ひますと申して懷中紙を出し上を一枚取りまして、盃の縁の圍り、又中をも能々拭ひまして臺に載せて亭主にさします。右、上客が懷中紙を取り出して盃をふきます間に、詰は最前膳の向ふ脇に預り置きました盃臺を上客の方へ廻します、尤も間の客が順次に取り次ぐので御座います。二客は爛鍋を取て酌をいたします。上客は盃を亭主にさし置きて、又懷中紙を取り出し、四ツに折て八寸を引きよせ肴を挟みまして亭主にあたへます。二客は亭主が盃の酒を半飲みました時分を見計ひまして何卒

御盃を頂戴と所望致します。

亭主はこゝでも何卒御二客様より頂戴と申します。

二客は是非に主人公の御盃をと重ねて乞ひます。

亭主は然らば御免下さりませと申し盃を前上客について申し

た通り懷中紙にて拭ひまして臺に載せ二客にさします、三客此

時酌をいたします。

亭主はまた三客へ肴をはさみます。

二客酒を飲みまして、かたの如く盃をふき臺に載せて亭主へ返

します、此時もまた三客が酌で御座ります。

二客懷中紙を出して亭主へ肴を挟みます、上客の致した通りで

御座ります。三客も亦二客の通亭主の盃を所望いたします、以下總て亭主も

賓客も同様の心得で酌は次の人がいたす事で御座ります、尤も

詰の酌は上座の人が取ります、かくて詰まで獻酬が終りました

れば亭主は又盃臺を持ちまして上客の前にまゐり、延引ながら御返

盃仕りますと述べまして盃を返し、又肴を挟みます。

上客これを受けました所で、一應主客の盃は相すみませ。

是より後は亭主よきほどに獻を受けまして勧めます、客も亦能

きほどに飲みます。

再進肴及び銚子の更り

再進肴及び銚子の更り

再進肴を出しますには、銚子の更ります時がよろしう御座りま
す、右の手に爛鍋左の手にしひ肴の鉢を持ちます、八寸を持出し

ます時と同様に御座ります。是にて今一獻としひます。肴の取様も八寸と同じことで御座ります。さて上客はよき程を見はからひ、連客とも申しあひまして、亭主に對し最早一統充分に頂戴仕りました。何卒御取入下さいませと申します。

亭主も能きほどに勧めまして、然らば御上客の御盃を戴きませうと申して、上客の盃を請ひます。

上客も然らば是にて御納盃被下ませと申して、盃をさし禮をいたします。

亭主も盃を受けて辭儀いたします。

二客前の通り酌をいたします。亭主は盃の酒を引きまして、然様ならば取入ますと申して禮をいたします。

上客以下も皆禮をいたします。是におきまして亭主は先づ八寸

と銚子を持って引き取ります。又出でまして再進肴の鉢を引き取ります。

湯桶を出す及び食事の仕舞

さて湯桶を持ち出します。湯桶は口を左にむけ手を右にいたし湯盆に載せて前に湯の子すくひを横に置きます。焼物の時に漬物が出して御座りませねば、爰で香物鉢をも一緒に湯盆に載せて出します。

湯桶の左に並べて置くがよろしうござります。筒様に致して上客の前に持ち出まして、先香物鉢を取り上げ前向ふに廻して上客の膳の右向に置きます。次に湯桶の蓋を右の手に取り天向て左の方に置きまして右の手に湯の子掬を取上げ湯桶の中へさ

し入れ、蓋をいたして湯桶の手を上客の方へ向く様に廻して香物鉢の上の方に並べて置きます。然様いたして吸物椀を取り入れます。これは客も煮物椀同様膳の右向ふに出し置きます。亭主は吸物椀をのせたる湯盆を持ち入りまして、勝手口に坐し跡をぬめ切り直に手水鉢へ浄水を加へにゆきます。これを中水と申します。

内露地外露地共に手水鉢のうは水を杓にて六七杯も汲み出しまして、つくばへの圍りへ洒ぎかけて、其跡へ新しき水揚桶の水をサ、サ、と溢れる迄入れ置きます。是は物馴れたる勝手の人にいたさせてもよろしう御座ります。高貴の御方の成らせられました節は亭主必みづからある事で御座ります。又極寒の節は湯桶を出します。内露地外露地共に出してよろし

う御座ります。湯の加減は少し熱いくらゐるがよろしう御座ります。能加減ならばさめやすうございます。故此注意をいたします。腰掛へは煙草盆、手焙圓座などそれ／＼初の通にあらためて出し置きます。

打水の乾きました所があらばまた能くうちしめします。若初入の後に雨が降り出しましたらば下駄笠を出して草履と取り替へ置きます。

客の方ではまづ上客は右向にある香物鉢を取りまして、香物はさみとりて次へまはし、又湯桶をとり、蓋をのけて、湯の子すくひにて湯の子を搔きたて、又は飯椀へすくひ取りまして、湯を椀へよき程ついで次へまはします。二客以下いづれも同様で御座ります。詰は香物鉢と湯桶を左の方の向へ出し置きます。左様い

湯桶を出す及び食事の仕舞

たしてめし椀汁椀ともにすゞぐ様にして、湯を呑み切ります、あ
 とに汚れた所があらば懷中の小菊にて和かに拭ひ取ります、向
 附も膳も同様にいたします、箸も亦別に懷中紙にて拭いて膳の
 内へ落し入れて亭主の出るを待ちます。
 亭主は客の膳を仕舞ひをはりましたる頃をはかりまして湯盆
 を持ち勝手口を明けて、一應うかゞひましてよろしくば、まづ湯
 桶、香物鉢を初の如く盆に載せて勝手へ引き下げます、又直に出
 まして、上客の膳より次第々々に引き下げます、客は各々前の膳
 を向へ出し膝を進め膳を取り上げまして、亭主へ手渡しして禮
 をいたします。
 亭主も膳を受けて持ちながら禮を返します。
 主客斯様にいたして、詰の膳を引ききたる時、亭主は勝手口に坐し

てあとを締め切ります、それから

菓子及び中立

菓子を出します、叮嚀に致す時は各々菓子盆にいれ、楊枝をつけ
 て、一々持ち出でます、略しては縁高に入れ重ねて蓋をいたして、
 其上に楊枝を人数前載せて持ち出でます、尙略しましては食籠
 やうの物に盛り込んで出す事もいたします。
 風爐の正午の茶湯にては、膳を引きまして勝手口をしめます、即
 て初炭をいたします、順序は御承知の通りで、香合をひき勝手口
 を締め、又更め開いて菓子を持ち出しまして、後中立と相成ます。
 さて亭主が菓子を出して、引き下り勝手口に坐しましたる時に、
 上客より暫く御免下さりませ、後刻は必ず御鳴物にて御知らせ

下さりませと申しませす。
 亭主はこれをうけて、緩々御休息下さりませ後刻御出迎申上ますとか、又は失禮ながら鳴物にて御知せ申上ますと申して、勝手口を締め切ります。
 當流におきましては、懇意の中に限りて此挨拶を略しても苦しう無い事に成て居ります、併これも時宜に依る事で御座ります、客は菓子盆の菓子を楊枝にさして取り懷中紙に載せてたべます、縁高は下の重より上の客が次第にとります、假令ば五客の時には上客は縁高の一二三四と重なりてあるまゝ、四ツ目を兩手の掌にて一寸ばかり向へよせて下にある五ツ目の一寸ほど明けたる所へ、蓋の上の楊枝を右の手に一本取り縁へかけて指し入れ置きます。

此時左の手は四重のあたりにあるまゝで御座ります、又右の手を左と同様にして四重共に持ち上げて次へ送ります、二客も同様にして四ツ目を取ります、三客以下も同じ事で御座ります、詰は蓋を兩手で取りまして左へ渡し右にて楊枝を取り縁高の中へ入れて蓋は上向にし右へ渡し左を添へて左向へ預り置きます、次で菓子をたべましたらば、器は順に下座に居る人が下へ下へと取次まして、詰に於て重ね勝手口の脇に出し置くがよろしう御座ります、左様にいたしておいて、詰は直にニジリ上りの戸を明け脇へ座を除けて居ります、尤も席に依りての事で一概には申されません、京都の舊宅不審庵などでは、三客あたりより以下座を少し除けねばなりません。
 是等は所謂臨機應變で、客一同が場數功者でなければならぬ事

で御座ります、又敬ふべき人に對しまする時は、詰は上客より先にニジリ上りを出まして、草履を直し、又腰かけの圓座をならべ、煙草盆手あぶり等も能所に直し置く事でござりますが、別段敬ふべきほどの人もなく同等の客のみならば前申上りましたやうな詰の務める事は御座いせん、左様いたしましたして、只上客より次禮をいたして後邊に置たる扇子を持ちまして、床に進み掛物を今一應見ますので御座ります、又爐前にゆきて爐中の火移り模様より釜を拜見いたします、併初めのやうに緩々はいたしませぬが、かやうにして一通り見了りましたらば、ニジリ上りの口に坐して、草履を取り、沓脱石の上に直して庭に出で腰掛に就きます、二客以下皆同様でござります、未客はニジリ上りの戸を締めますが、ハタと音のする様に立ち切る事で御座ります、客いづ

れも腰掛へ出ましたならば、喫煙などいたし庭の模様を見まして休息いたします、又廁へゆきますには休息より前にいたす事で御座ります。
亭主出迎の後に行きますは、遅くなりてあしう御座りますから能く心得ねばならぬ事で御座ります、尤も先がつかへた時は是非も御座りません。

後坐の準備

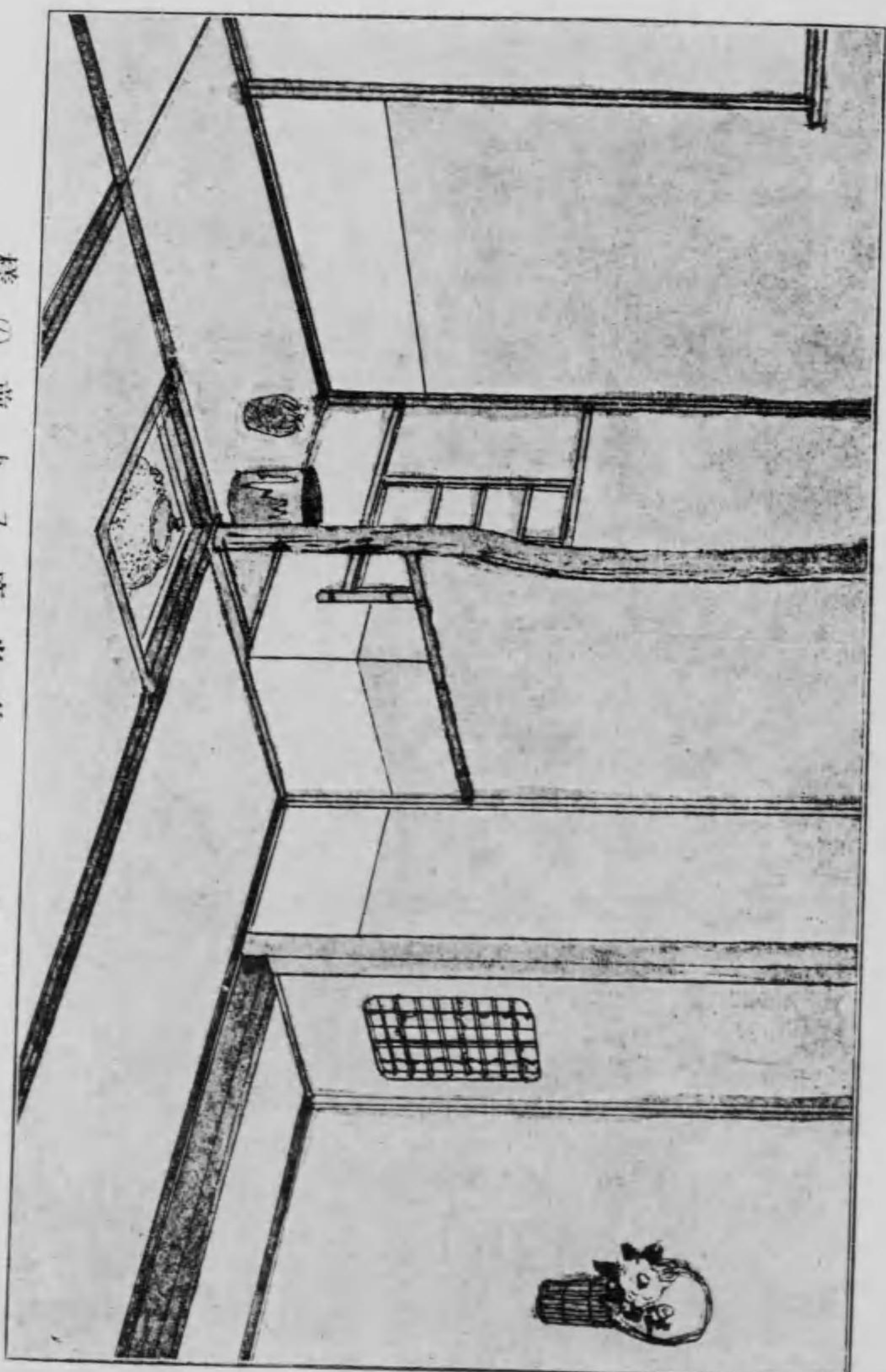
是から亭主はニジリ上りの戸が締りました音を耳にしましたらば、直に茶室に出まして先づ菓子盆を取入、又出まして、ニジリ上りの懸金をかけ置いて、釜の蓋を締め、懸物を巻き取りまして、大羽を以て室内を不殘座掃いたします、尤も先がつかへた時は是

上りの外へ掃き出して宜敷御座ります、戸の懸金はもとの通かけ置きました、羽箒は勝手へ持ち入れ、花生を持ち出で花をいけ、又爐縁を拭ひて釜の口を切り、水指、茶入の飾り付をいたします、棚があれば薄茶器をも飾り置きまして服を更めます。

後坐の出迎へ、鳴物、竝に後坐の席入り

さて是より出迎へと云ふ順序で御座ります、尤も同輩又は少し敬ふべき人にては亭主が老人で露地が長ければ鳴物にて知らせるもよろしう御座ります、露地が短かくば出迎をいたす事で御座ります、又同輩でも主人が若年ならば、露地は長くとも出迎へいたすが宜敷ので御座ります。

高貴の方御成の節は假令亭主が老人なりとも、露地が長いとて



様の前入り席坐後、内室茶 (圖四)

必御出迎申上ぐる事で御座ります、若し高名な鳴物で御所望が御座りましたる時は御聞かせ申さぬも悪う御座ります、故其節は打ておいて御出迎申上るが宜敷御座ります、何も時宜に依ること御承知置願ひたう存じます、又鳴物の打ち様は初めにニジリ上りの戸を手かゝり丈け明け置きまして後うつ事で御座ります。

廣い露地は銅鑼、狭い露地は半鐘と先づ定めて御座ります、銅鑼半鐘共五聲、又は七聲にうちまます、五ツ打時は大中小々大と打わけます、七ツ打時には大小大小中々大と打分くる事で御座ります。

客は鳴物の音がいたしますと謹聽して禮をいたす事で御座ります、敬ふべき人の知らせは、腰かけを離れて立つて聞くが宜敷

御座ります、貴人の御知らせは下座をいたして拜聴仕ります、此心得なども身の分限に依ること、一概には申されませぬ、故其處はよろしく御聞わけを願ひます、前に戻りて申上ますが、亭主も初入に變り、御座りませぬ、客の心得も同様で御座ります、亭主は右の案内が終りましたらば、水屋に就きまして茶碗茶匙、茶巾、茶筌を仕組、建水に杓蓋置を仕組み、又炭斗へ炭を組、其外の物を取合せ、炮烙へ灰を入、薄茶器に薄茶をはき、菓子盆に惣菓子、を盛り、煙草盆、手焙の用意をいたしました、客入を待ちます、客は出迎、又は知らせが御座りましたらば、成べく速かに席入を致すがよろしう御座ります、これを後入と稱へます、後入も初入に別段變りは御座りませぬ、が御承知の通茶室に入りましては

手

濃茶進獻

各先づ床前にすゝみて、花活を見ます、第二に爐前に行きまして釜の沸え様を見、又水指より茶入の飾付までを見て、座に着き、す、詰は又ニジリ上りの戸をハタと締め切ります、亭主は此音を聞き、ますと、直に水揚桶を持ちまして、手水鉢の水を増しにゆきます、是は前の通勝手方に申付けて宜しう御座ります、茶室の明り、勝手によりましては、連子又は下地窓の簾の中を取りのけ、まして悪しう御座りませぬ、腰かけの圓座、煙草盆、手あぶり等は、此時引き入れ、ますが宜しう御座ります。

さて是より濃茶で御座りますが、以下は平常の御演習で別て御手馴の事では御座りますが、往々間違ひ易い處、だけをかいつま

んで申上ます、亭主形の如き順序にて杓を引流したらば、主客惣禮直に、

上客は花の挨拶を致します、花入は後に譲り無言なるのみならず整肅で、亭主の點茶を見ます、茶がたちましたらば、上客進み出て茶碗帛紗の出るを待ち直に取りまして、本座に復り茶碗帛紗共前に置きまして、今度は客方惣禮するので御座ります、二客以下は次禮で、上の客の二口めのかゝりに下の客へ禮をいたす事で御座ります、上客茶を一口呑みましたる時に、亭主は服加減を尋ねます、上客至極の御服加減と答へ禮を致します、亭主も禮を致しまして、中仕舞常の如くいたし一膝おくり手を拱きて、詰の吸ひ切りまするを伺ひ居ります。上客は濃茶を例の三口半呑終りまして、茶碗を二客に廻し、禮を

いたしました、二客も茶碗を持ちながら禮をいたします、以下皆同様で御座ります、又

上客は二客が茶を一口呑みましたる後に亭主へ結構なる御茶で御座ります、御詰は孰れで御座りますかと問ひます、亭主は茶元を答へます。

上客は又續いて御銘はと尋ねます。

亭主茶銘をこたへます、菓子か美しう御座りましたらば此處で挨拶をしてよろしう御座ります。

花器もこゝにて賞美いたし、若しわからねば尋ねる事で御座ります、詰は濃茶を綺麗に音のする様吸ひきります、亭主は此吸切の音を聞きましたらば膝を廻し元に復りて、いつもの手續をいたし、釜へ水を一杓さして茶碗の戻るを待ちます。

詰は茶碗、帛紗を上客へ戻します、上客は帛紗を脇に預り置きま
して、次禮なし茶碗を見ます、二客以下次禮同様で御座ります。
上客茶碗を見了りましたらば二客へ送りおいて後水指を尋ね
ます。

亭主は能程に答へます、又
上客は末客の茶碗を見終ります時分に茶碗を尋ねます、詰は茶
碗を上客へ戻す、上客は今一應茶碗を見まして帛紗と共に定め
の所へ返します、水指は先刻より一同見たる故爰にて向亭主帛紗を懐中し
て茶碗の呑口をあらため、下へ置いたる所にて主客惣禮するの
で御座ります、是より亭主は仕舞の順序を了へまして、水指の蓋
をいたしたる時、其手の膝に返らぬうちに、
上客は御茶入、御茶匙、御袋を拜見と乞ひます。

亭主受て禮をいたし、いつもの様な手續に依りまして右の三種
を定めの所へ出します。

上客は亭主が建水を持って勝手へ引き入ります時に、進みて三種
を取り座に復りて上の方に預り置きます、そして亭主が右三種
の外道具全部を引き入れまして勝手口を締めましたる後、次禮
して茶入、茶杓、袋など次第に見て一々次へ送ります。

二客以下同様で御座ります。
亭主は詰の三種を見まする時分に勝手口を開きて、其戻るを待
居ります、詰は三種を上客へ戻しますると、上客はこれを今一應
見まして、定めの處に返します、亭主これを引きに出でましたら
ば、そこで上客は茶入より初め茶杓袋と一々尋ね、又賞美など能
い程にいたします。

亭主はこれを請て一々答禮いたし引き入りまして直に

後炭、竝に薄茶

後炭で御座りますが初炭といさゝか異りのある所は皆様御承知の筈で御座ります故別に申しません、後炭終りまして勝手口其儘明置直に煙草盆手あぶり菓子を持ち出でます、若し客より書付類の所望が御座りましたらば、此時出してよろしう御座ります、又菓子は薄茶にかゝります時に持ち出でましても苦しう御座りません。

上客は煙草盆が出ましたらば、直に取りまして二客との間に置きます、二客も又これを取り三客との間に置くと云ふやうな順序にいたす事で御座りますが、しかし是等は上下の間程克く見

計ひ必ず今申し上げたやうの方法にせねばならぬと云ふ窮屈な事は御座りませぬ故其處臨機の御計ひに願ひます、又上客は煙草盆の後へ手あぶりが出ましたらば是をも直に取りて煙草盆と同じ順序にいたす事で御座ります、又手あぶりの後へ惣菓子が出ましたらば上客はこれを取りて、我上の方の向脇に預り置きます。

亭主は煙草盆其他右の通り出し置き、勝手口の外に坐して挨拶をいたします、即ち定めて御退屈で御座りませう、何卒御煙草にても召しあがりませ、などの事申すので御座ります。上客よりも結構なる御茶を頂戴仕りまして有り難う御座ります、どうか此方へ御出まし御休息遊ばされませ、と挨拶をいたします、其處で亭主は御免を蒙りますといひて茶室の内へ膝行し

進み出まして暫時休息をいたします客が同等の人ならば上客へ斷を申して煙草盆を持ち入つても苦しう御座りません併し敬禮すべき客の時には決して煙草盆は持いらぬ事で御座りませ又此休息の間は客と相應の話しをいたして宜しう御座りませ尤も南坊が七箇條の掟も御座りませれば俗事にかゝりましたる事は避く事で御座りませ

さて釜が沸えませれば亭主は薄茶を點にかゝります先づ勝手口の外に退き一應締め切りて水指を持ち進んで茶點口を明けます點茶の次第は御熟知の通で御座ります

上客は亭主が茶杓を取り茶器をも取りませ時分に菓子盆を我前に直して置き亭主へ御菓子を取頂戴いたしますといふ挨拶をなし又次禮をいたしまして惣菓子を取り二客へ廻します以下

詰まで同様で御座ります左様いたして詰は惣菓子盆を吾前向脇に預り置きます

上客茶碗を尋ねますは詰の見終る時分がよろしう御座りませ尤もこれは替茶碗の事を申すので本茶碗はさいせん濃茶の節に相濟ました事を御承知下さりませさて一順薄茶喫みまして亭主の相伴と成ります詰は菓子盆を亭主の方へ廻します又上客より仕舞を申し入れまして後亭主は禮をいたし仕舞の順序にかゝります詰は惣菓子盆を上客の前に直し置きます

上客は惣菓子盆を取りまして初め預りましたる所に置きます薄茶器を請ひまするは濃茶の時三種を請ひましたると同様で是等は別段申すまでもない事で御座ります薄茶相濟み亭主水指を引きまして一應勝手口を締めます又直に勝手口へ出まして

其口を開きしまゝ挨拶をいたします、此時も最前同様の心得で、煙草盆を室内へ持ち入りて苦しい御座りません。客も亦少々最前の様話を致します、尤もあまり長うは、はなしません、昔時は一會始終二時、今の四時間に過ぐべからずと彼南坊が七箇條の内に掟いたしました、併し其但書に法話清談に時うつるは制外との取り除け法も掲げて御座ります、故強ちにも申されませぬなれど、先づいはゞ煙草の二三服乃至四五服くらの時間に止むのが普通で御座ります、さて客は申しあひ上客より亭主へ對して退散の挨拶をいたします。

退散

亭主は吾煙草盆を持って勝手口の外に引き下りまして、上客の禮

を受け又此方も挨拶をいたします。

二客以下皆同様で御座ります、禮了りますれば、

亭主は勝手口を締め切りまして、勝手の方の然るべき所に着坐致して客の退出を見合せて居ます。

客は中立の時と同様の心得にて、上客より次禮をいたし、花をは

じめ、爐中より釜などを今一應見てニジリ上りを出で、中門を開

き、腰掛の前に立て、亭主の送り出でまするを相待ちまする、二客

以下皆同様でいづれも此時は腰掛に凭らずと立ちながら待て

居る事で御座ります、詰は勿論中立の時の心得で萬事に意を用

ひ、ニジリ上りの戸も例のハタとたてきり中門をもしめす。

亭主はニジリ上りの戸のたちましたる音を聞きますると直に

勝手口を開き又ニジリ上りを明けて庭に下り、中門を開いて禮

をいたします。

客方も惣禮で御座ります、主客禮了りますれば、

亭主は中門を締めて茶室に引き入ります、此時はニジリ上りの

戸を締めてかけ金をも懸け置きます。

客は亭主が中門を締めて内露地を半分ばかり引き取ります

を見て上客より次第に袴着へ引き取ります、各着坐致して惣禮

で御座ります、それより各々上客へ挨拶いたして後退散仕りま

す、先づ茶會の次第は畧ぼ斯様の事で御座ります。

因に本文の初にも云ふが如く、茶會は強ひて茶室、庭園等の設

備なきも實行し得らるゝ者なり、普通の家作にて臨機の處置

をなし、茶會を催すは、茶道の本意なり。例へば住所が座敷二

間と、其の間を通ふべき縁側と勝手と入口一間位の間取りと

せば座敷一間を茶席とし、他を待合とし、縁側を露地として、客

の出迎へより初座の席入り、食事、中立、後座の席入り等と順次

に執り行はるゝなり。尚縁側には便所の手水の外に湯桶等

適宜の品にて手洗水を備ふべきなり。最も勝手臺所の手配

は、家内の者が殊に周到なる注意を拂はざるべからず。

茶會の心得終

退散

11
568

不許
複製

大正十一年五月十八日印刷
大正十一年五月廿五日發行

非賣品

著作者

六世三谷宗鎮

發行者

七世三谷鶴子

印刷者

本間十三郎

印刷所

東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社

終

